

〔報 告〕

父親からみた第一子出生前後における夫婦関係の評価 — 家族イメージ法による分析を中心に —

佐々木裕子¹⁾ 高橋 真理²⁾

要 旨

本研究は、はじめて親となる男性69名を対象に、子どもの誕生による夫婦関係ならびに父・母・子三者関係の変化を検討した。評価指標として、夫婦関係尺度、さらに夫婦関係をふくむ家族関係のより客観的評価を目的として家族イメージの描写を用いて検討した。その結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 子どもの出生前後における夫婦関係の評価において、夫婦関係尺度「Marital Love Scale」総得点は有意な差は示されなかったが、家族イメージ図内に線の太さで表現される「夫婦間の結びつき」は子どもの出生後に有意 ($p < 0.05$) に低下した。
- 2) 子どもの出生前後において父親個人の関心の向きは、妻から子へと変化した。
- 3) 家族イメージ図の関心の向きによる父・母・子三者関係のパターンは「三人向き合い」「夫婦向き合い」「母子向き合い」「父子向き合い」の4つに分類され、子どもの出生前に比べ出生後に「夫婦向き合い」の占める割合が有意 ($p < 0.05$) に減少し、「母子向き合い」が有意 ($p < 0.05$) に増加した。

以上、家族イメージ法による父親からの評価を試みた結果、子どもの誕生による夫婦から親子への家族システムの変化における関係性の変化が示され、家族イメージ法が子どもの出生後早期の家族関係の評価指標として有用である可能性が示唆された。

キーワード：父親、子どもの誕生、夫婦関係、家族システム、家族イメージ

1. はじめに

子どもが生まれ新しい家族が形成される親への移行期は、新たな親役割の取得と夫婦関係の調整が大きな課題である。とりわけ男性は、女性が出産前から身体の変化や胎児との相互作用を通して母親となる準備や児への愛着を形成し、さらに出産や育児を通して母親としての能力を高めていくのに比べて親になる実感は遅く、生まれた子どもとの相互作用を通して父親としての自覚を深めていく^{1)~3)}。そのため、はじめて父親になる男性にとって子どもの出生後早

期は女性以上に役割移行に伴う調整が必要であると推察される。一方、家族は個人や夫婦・親子などのサブシステムからなり、それぞれが互いに相互作用する⁴⁾⁵⁾ため、子どもの誕生により夫婦から親子へと家族システムが複雑になるこの時期は夫婦間に葛藤が生じると考えられている^{6)~8)}。Belskyら^{9)~11)}の研究においても、子どもの誕生後夫婦関係は悪化するとして夫婦から親への移行は危機的移行とされており、従って、子どもの誕生後早期に夫婦関係を評価することは看護において重要といえる。

しかし、これまでわが国において、親への移行に伴う夫婦関係の変化を男性側から縦断的に調査した研究はほとんど見当たらない。そこで、本研究は、はじめて親となる男性が自分と妻、ならびに子ども

1)杏林大学保健学部

2)北里大学看護学部

との三者関係をどのように認知しているのか、子どもが生まれる前と生まれた後とで比較し、その変化を明らかにすること、さらに、夫婦関係を中心とした父・母・子の三者関係のより客観的な評価指標として家族イメージ法を用い、その有用性を検討することを目的とした。

II. 研究方法

1. 用語の操作的定義

本研究では、夫婦関係を以下のように定義した。

夫婦関係とは、第一子を妊娠中および出産後の夫婦の人間関係の中の親密さをさす。

2. 対象および調査方法

2003年5月～8月に3医療施設、2保健センターの妊婦健診および出産準備クラスにおいて、第一子妊娠中の妊婦とその夫に対し子どもの出生前・後2回の調査協力を依頼した。同意の得られた夫婦221組に対し、1回目の自記式質問紙調査ならびに家族イメージ法を実施した。なお、家族イメージ法の記入に際し、実施方法を記載した用紙を用いて約10分間の記入上の説明を行い、その場で自分の家族イメージ図を描写してもらった。生まれる前の子どもについては、「おなかの赤ちゃんはご両親をどのようにみているでしょうか？」と質問した。136組から回答が得られ（回収率61.6%）、次にこの中で、子どもが生後1ヵ月半～2ヵ月になった110組に対し、郵送法により2回目の自記式質問紙調査ならびに家族イメージ法を実施し、77組より回答を得た（回収率70.0%）。2回目の調査時期は、里帰り出産を考慮し、出産後の生活が軌道に乗り始めた頃と考慮して設定した。なお、今回は子どもの出生前後ともに有効回答の得られた父親69名を分析の対象とした。

3. 調査内容

主な調査内容は以下のとおりである。

1) 家族イメージ法（亀口ら、1988）¹²⁾

家族イメージ法（Family Image Test ; FIT）とは個人の抱く現実の家族イメージを視覚的に把握する

投影法の一つで家族アセスメントに有用であることが検証されている¹³⁾。具体的にはB4版のFIT用紙の15cm×15cmの正方形の枠内に回答者が家族成員に見立てた直径1.6cmの丸いシールをその人がいつも向いている方向にシール内の▲印を向けて貼り、最後にシールとシールの間を線で結んで自分の家族イメージを完成させるものである（図）。①シールの色は個人のパワーや発言力を表すもので黒から白の5段階に色分けされており、黒（5点）～白（1点）に得点化され得点が高いほどそのパワーが強いことを示す。②シールの向きは家族成員の心の向きを表すとされる。家族全員の▲印の向きから、父・母・子が家族の中心を向いている場合には「三人向き合い」、特定の成員が向き合っている場合には、成員の組み合わせから「夫婦向き合い」「母子向き合い」「父子向き合い」として分類した。③シールの結びつきは家族成員同士の結びつきの強さを表すものでシール間を結ぶ3種類の線で表される。——結びつきが強い（3点）、—結びつきがある（2点）、----わからない（1点）として得点化した。④シール間の距離は家族成員間の心理的距離を表すとされシール間を結ぶ線の長さの実測値をもとめる。⑤シールの高さは各家族成員のシールが枠内のどこに配置されたかによりその領域を分類する。なお、家族イメージ法は再検査法により高い信頼性が得られている（rs=0.52～1.00）¹⁴⁾。

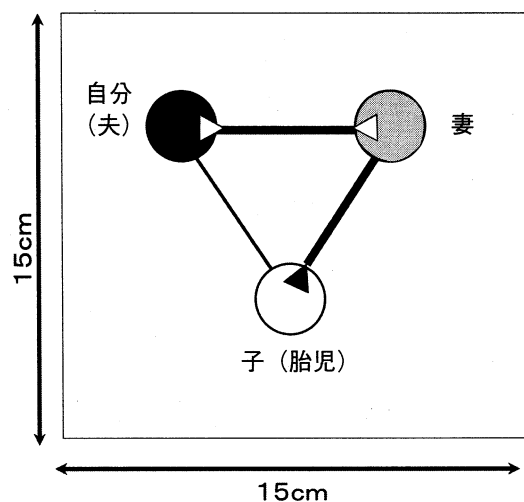


図. 家族イメージ図の記入例

2) Marital Love Scale (菅原ら, 1997)¹⁵⁾

Marital Love Scaleは夫婦間の愛情関係を測定する尺度で10項目からなり、因子分析による寄与率は49.71%、信頼性係数はCronbach $\alpha=0.93$ であり、高い信頼性が確保されている。評定は“全くあてはまらない(1点)～非常にあてはまる(7点)”のリッカート方式による7件法で回答を求め、10項目の各得点を加算し、合成得点が高いほど夫婦の親密性が高いことを示す。

4. 分析方法

分析は統計ソフトSPSS11.0J for Windowsにより基本統計量の算出後、スピアマンの相関係数をもとめ、Mann-WhitneyのU検定、Kruskal-Wallisの検定、ならびに χ^2 検定により出生前後の変化を検討した。家族イメージ図については、FITマニュアル¹⁶⁾を参考に夫婦関係および三者関係の評価として「結びつきの強さ」「シール間の距離」「シールの向き」について分析した。

5. 倫理的配慮

研究者自身が対象者に研究の趣旨および目的を口頭および文書にて説明し調査協力を依頼した。調査は任意であり協力の有無により不利益を受けないこと、同意した後でも調査を中断できること、調査結果は研究以外には利用しないこと、プライバシーの保護などを説明し、書面にて研究参加の承諾を得た。また、回答に際し夫婦で相談しないこと、別々の封筒で回収することを約束した。

III. 結 果

1. 対象の属性ならびに夫婦関係との関連

対象の属性を表1に示した。生まれた子どもは全て正期産児、単胎であり、健康上大きな問題を有するものはみられなかった。なお、出生前の調査での妻の妊娠週数は 34.9 ± 2.8 週であり、出生後の調査での子どもの生後日数は 71.7 ± 17.6 日であった。次に、夫婦関係の評価指標として用いたMarital Love Scaleならびに家族イメージ図の量的変数である夫

表1. 対象の属性

属 性		(%)	mean±SD(range)
年 齢(歳)			31.4±5.8(20~47)
結婚期間(月)			31.7±28.3(2~108)
就業形態	常 勤	65(94.2)	
	自営業	4(5.8)	
結婚の状況	未 婚	5(7.2)	
	婚約中	5(7.2)	
	既 婚	59(85.5)	
妊娠の計画性	あり	48(69.6)	
	どちらでもない	15(21.7)	
	なし	6(8.7)	
里帰り出産	あり	43(62.3)	
	なし	26(37.7)	
家族構成	核家族	65(94.2)	
	複合家族	4(5.8)	
子どもの性別	男	37(53.6)	
	女	32(46.4)	
在胎週数(週)			39.6±1.1(37~42)
出生時体重(g)			3087.4±361.3 (2450~4100)

婦間結びつき、夫婦間距離を対象の属性別に検討したが、いずれも有意な差は認められなかった。

2. 子どもの出生前後における夫婦関係

今回の対象者におけるMarital Love Scaleの因子分析の結果を表2に示す。10項目の信頼性係数は $\alpha=0.87$ であり、高い内的整合性が確認された。次に、Marital Love Scale 総得点と家族イメージ図の「夫婦間結びつき」(シールを結んだ線の太さ：<結びつきが強い>3点~<わからない>1点)、ならびに「夫婦間距離」(夫婦のシールを結んだ線の長さ<cm>)の相関関係は、子どもの出生前でのみ、Marital Love Scaleと夫婦間結びつきの間で相関係数 $r_s=0.23$ ($p<0.01$)であり、弱い正の相関が示された。次に、これらのスケールの平均を子どもの出生前後で比較した結果(表3)、夫婦間結びつきは子どもの出生前に比べ出生後に有意($p<0.05$)に低下したが、Marital Love Scaleならびに夫婦間距離はいずれも有意な差は示されなかった。

表2. 夫婦関係尺度「Marital Love Scale」の構造 (主成分分析)

項目	負荷量
$\alpha=0.87$	
6. 妻は魅力的な女性だと思う	0.81
3. 妻と一緒にいると妻を本当に愛していることを実感する	0.81
9. どんなことがあっても妻の味方でいたい	0.78
2. 妻のためなら何でもしてあげるつもりだ	0.74
8. 妻が幸せになるのが私の最大の関心事だ	0.74
1. 妻とは今でも恋人同士の様な気がする	0.69
7. 妻は言葉に出さなくても私の気持ちを理解してくれる	0.64
10. 妻を一人の人間として深く愛している	0.61
5. 妻のことならどんなことでも許せる	0.59
4. 妻とは互いに出会うためにこの世に生れてきたような気がする	0.58
寄与率(%) 48.26	

表3. 子どもの出生前後の夫婦関係(n=69)

	出生前	出生後	有意差
Marital Love Scale合計得点(点)	53.8±9.1	53.7±8.3	n. s.
家族イメージ法			
夫婦間結びつき(点)	2.9±0.3	2.7±0.4	**
父子間結びつき(点)	2.4±0.7	2.6±0.6	n. s.
母子間結びつき(点)	2.8±0.4	2.8±0.4	n. s.
夫婦間距離(cm)	3.3±1.8	3.5±1.7	n. s.
父子間距離(cm)	3.5±2.5	3.2±1.9	n. s.
母子間距離(cm)	3.2±2.3	3.1±1.7	n. s.

Mann-WhitneyのU検定 **p<0.01
n. s.=not significant

表4. 子どもの出生前後における
家族イメージ図の「関心の向き」の変化(n=69)

		出生前	出生後	有意差
夫の関心	妻	32.3	11.9	*
	子	21.5	49.3	*
	妻と子	44.6	37.3	n. s.
	よそ	1.5	1.5	n. s.
妻の関心	夫	18.5	6.0	*
	子	43.1	76.1	*
	夫と子	38.5	17.9	*

χ^2 検定 *p<0.01
n. s.=not significant

3. 子どもの出生前後における父・母・子三者関係
家族イメージ図の「シールの向き」(▲印)により
夫の認識する家族の心の向きについて検討し、その
比率を子どもの出生前後で比較した。

1) 夫および妻の個人の関心の向き(表4)

まず、夫の98.4%が家族の内側に関心を向けていた。具体的には、出生前は妻と子(胎児)双方に関心を向けていたものが44.6%と最も多かったが、出生後は子どもとしたものの割合が約半数を占めた。また、妻へ関心を向けていたものは出生前32.3%であったのに対し出生後は11.9%と子どもの出生前に比べ出生後に有意(p<0.05)低下する一方、子への関心は21.5%から49.3%へと出生後に有意(p<0.05)に増加した。

次に妻の関心の向きを夫がどう認識しているかを見てみると、全ての妻が家族の内側に関心を向けており、具体的には出生前後ともに子ども、夫と子、夫の順位は変わらないものの子どもへの関心が出産

後に有意(p<0.05)に増加し、夫への関心は出産後に有意(p<0.05)に低下した。

2) 三者の関心の向きのパターン

家族イメージ図に示された父・母・子三者の向きを、家族の中心を向いているか、特定の誰かと向き合っているかを基準に検討した結果、「三者向き合い」「夫婦向き合い」「母子向き合い」「父子向き合い」の4パターンに分類された。今回は4パターンに属さないイメージ図は分析から除外し、比率の差を出生前後で比較した(表5)。その結果、「三者向き合い」が両時期ともに大半を占める一方で、「夫婦向き合い」が出生前19.6%から出生後3.4%と有意(p<0.05)に減少し、「母子向き合い」が23.3%から41.4%へと出生後に有意(p<0.05)に増加した。一方、出生前にはみられなかった「父子向き合い」が出生後に3.4%みられた。

表5. 子どもの出生前後における家族イメージ図の「関心の向き」による3者関係の変化(n=69)

	出生前	出生後	有意差
三人向き合い	57.1	43.5	n. s.
夫婦向き合い	19.6	3.4	*
母子向き合い	23.3	41.4	*
父子向き合い	0.0	3.4	n. s.

χ²検定 *p<0.01
n. s.=not significant

IV. 考察

1. 子どもの誕生による夫婦関係の変化

先行研究により子どもの誕生後夫婦関係は悪化するという仮説を立て、夫婦関係尺度ならびに家族イメージ法を用いて検討した結果、Marital Love Scale 総得点では夫婦の親密性に有意な変化がみられなかったのに対し、家族イメージ図による夫婦の結びつきの強さは子どもの出生前に比べ出生後に有意に低下した。また、家族イメージ図の夫婦間距離は出生前に比べ出生後に長くなったが有意な差は認められなかった。

エリクソンは、新婚期には夫婦相互の親密性が重要であり愛を感じる力をもつことができれば次の成人期で人を世話する力につながる¹⁷⁾としている。そのため、夫婦間の愛情関係を計る目的で開発された Marital Love Scale を夫婦関係の評価指標のひとつとして用いたが、子どもの出生後早期の夫の妻への愛情は変わらないということがわかった。これに対し、多くの先行研究が夫婦関係を結婚満足度や夫婦関係満足度としている⁷⁾¹⁸⁾¹⁹⁾ことから、仮説と異なる結果が示されたのではないかと考えられる。また、先行研究では出産後の結婚満足度等の低下を指摘しておきながらそのほとんどは妻側を指している⁷⁾²⁰⁾²¹⁾ことから、今後、夫の妻への愛情の程度というより、むしろ夫と妻の夫婦関係の認識のズレを視野に入れた検討が必要と考える。また、ヒルは第一子の誕生後一時的に夫婦関係は悪化するが、家族の関係性の修復には夫婦間の積極的な共同行動やコミュニケーションが大切である²²⁾としている。今回の調査は子

どもの出生後早期に夫婦関係を評価することで、その後の夫婦関係や親子関係など家族全体の発達を考える上で意義があると考え調査時期を設定したが、今後長期間続く育児という共同作業の中での夫婦がどのように変化していくか、あるいは育児の協力体制や夫婦のコミュニケーションの実態との関連から夫婦関係を評価していくことも重要である。

一方、家族イメージ図では、シール間の結びつきの強さは家族成員間の各関係の良好さを表し²³⁾、シール間の距離の短さや結びつきの強さが家族の凝集性を表現する¹⁴⁾とされていることから人間関係の良さや情緒的な結びつきの強さを表すと考え、シール間の距離と結びつきに着目して分析した結果、夫婦の結びつきは子どもの出生前に比べ出生後に有意に低下した。これは、家族イメージ法が自分で表現する作業法であることが影響しているのではないかと考えられる。つまり、父・母・子という三者関係の中での夫婦関係の描写であり、家族の中に子どもという妻以外に愛情を注ぐ対象が現れたために二次的に妻への結びつきが低下した²⁴⁾ことが描かれたと考えられ、Marital Love Scaleの結果には現れなかった家族システムの変化による家族の関係性の変化が示されたとも考えられる。

一方、夫婦間距離は子どもの出生前後で有意な差は示されなかった。小学生から大学生を対象とした先行研究の父母間の距離(4.7~6.9cm)²⁵⁾と比較すると短いことがわかる。親への移行期にある夫婦は出産や子育てによりもともと密着しているといえ、このことが結果に影響したのではないかと考えられる。

2. 家族イメージ法による夫婦関係、父・母・子三者関係の評価

前述した家族イメージ図の「線の太さ」「シール間距離」に加え、こころの向きを示す「シールの向き」では、父親個人の関心の向き、ならびに父・母・子三者の関心の向きの評価を行った。その結果、父親個人の関心の向きでは約半数の男性が子どもが生まれる前から妻と子双方に関心を向けていること、さらに父・母・子三者の関心の向きでは、4つの三

者関係のパターンが見いだされ、出産前後を通して「三者向き合い」が大半を占める一方で、「夫婦向き合い」が減少し「母子向き合い」が増加した。すなわち、子どもが生まれる前から子どもを家族の一員として捉え、父親としての心の準備をしていることや、子どもが生まれたことで妻の関心が夫から子どもへと変化したことを視覚的に捉えることができ、量的なスケールによる家族関係の評価では見いだせない結果が示されたのではないかと考えられる¹⁴⁾。

家族イメージ法は人々の「心の鏡」とされ、従来、家族内の問題発生を予防し早期に対処するのに有効な方法²⁶⁾として用いられているが、今回の分析で三者の関心の向きが4つのパターンに分類できたことから、親への移行期に特徴的な家族関係の一部分を見いだすことができたのではないかと考える。今後さらに研究をすすめる、この時期の家族イメージを一般化できれば、問題とされる母子密着に対する父親の嫉妬心²⁷⁾や、臨床予備軍を早期発見²⁸⁾し、夫婦関係の再構築に向けての早期介入が可能になるのではないかと考える。

最後に、本来家族イメージ法は家族が同席した場面で実施し、その結果を家族が互いに共有するところに大きな特徴がある²⁶⁾。結果では述べなかったが、完成した図を夫婦が互いに見合い、そこから夫婦関係や子育てにまで話が発展したこともあり、家族イメージ図の描写が夫婦間のコミュニケーションを促進するきっかけにもなりうると思われる。

V. 結 論

はじめて親になる男性を対象に新しい家族の誕生による夫婦関係、そして父・母・子三者関係の変化を検討した。その結果、尺度による夫婦の親密性は変化しなかったが、家族イメージ法による夫婦の結びつきは子どもの出生後に有意に低下した。また、家族イメージ図内の父親個人の関心の向きは妻から子へと変化する一方、三者の関心の向きでは「三人向き合い」「夫婦向き合い」「母子向き合い」「父子

向き合い」の4つのパターンの内、「三人向き合い」が大半を占める一方で「夫婦向き合い」が出産後有意に減少し、「母子向き合い」が有意に増加した。家族イメージ法により夫婦から親子への家族システムの変化が示された。

VI. 本研究の限界と今後の課題

本研究は子どもの誕生による夫婦関係の変化を子どもの出生前と後で検討した短期縦断的調査である。出産前後ともに回答が得られたものを対象としたため対象の数が少ない。また、子どもの誕生は家族システムに変化をもたらすことから家族関係のアセスメント法であるFITを用いたが、実際は限られた項目を分析した点や、指標ごとに分析するという従来のFITそのものの分析方法の限界²⁵⁾から対象の家族イメージを正しく読み取ることができたかという点で課題が残る。今後はFITに表現された指標の評価を詳細に検討するとともに、インタビュー等により妻側からの検討を加え、親への移行期の家族関係の特徴を見いだすことが課題である。

謝 辞

本研究を行うにあたり、調査に快くご協力頂いた皆様、調査の場を提供していただいた医療施設の皆様にこころより感謝申し上げます。また、家族イメージ法に関して貴重なご示唆をいただいた東京大学大学院教授亀口憲治先生に深謝いたします。なお、本研究は北里大学大学院看護学研究科に提出した修士論文の一部に加筆修正したものである。本研究の要旨は日本家族看護学会第11回学術集会で発表した。

〔受付 '05. 6. 9〕
〔採用 '07. 3. 9〕

文 献

- 1) 小野寺敦子：父親になる意識の形成過程，発達心理学研究，9（2）：121-130，1998
- 2) 藤原千恵子：父親の家事育児行動に関する縦断的研究，小児保健研究，56（6）：794-800，1997
- 3) 新道幸恵，和田サヨ子：母性の心理社会的側面と看護ケア，123-128，医学書院，東京，1996
- 4) 数井みゆき，無藤隆，岡田菜摘：子どもの発達と母子関係・夫婦関係：幼児を持つ家族について，発達心理学研究，7（1）：31-40，1996

- 5) 森山美智子：ファミリーナーシングプラクティス，家族看護の理論と実践，44-62，医学書院，東京，2001
- 6) 森田恵子：妊娠・出産期の家族に対する家族看護：村田恵子，荒川靖子，津田紀子監訳：家族看護学－理論・実践・研究－，117-124，医学書院，東京，2001
- 7) 堀口美智子：第1子誕生前後における夫婦関係満足度－夫と妻の差異に注目して－，家族関係学，21：139-151，2002
- 8) 渡辺裕子：第1子出生による家族の適応過程，千葉大学看護学部紀要，17：1-12，1995
- 9) Belsky J., Spanier G. B., Rovine M. : Stability and Change in Marriage Across to the Transition to Parenthood, *Journal of Marriage and the Family*, 45: 567-577, 1983
- 10) Belsky J., Rovine M. : Patterns of Marital Change Across the Transition to Parenthood; Pregnancy to Three Years Postpartum, *Journal of Marriage and the Family*, 52: 87-93, 1990
- 11) Belsky J., Kelly J. / 安次嶺佳子：子どもを持つと夫婦に何が起こるか，草思社，東京，1995
- 12) 亀口憲治：家族イメージ法による家族関係認知に関する研究，*家族心理学研究*，2（1）：61-74，1988
- 13) 中野まり，亀口憲治：思春期の子どもとその両親の家族イメージ－臨床群と非臨床群の比較を通して－，*福岡教育大学紀要*，41（4）：283-290，1992
- 14) 柴崎暁子，亀口憲治：家族イメージ法のプロトコル分析と再検査信頼性の分析，*家族心理学研究*，15（2）：141-148，2001
- 15) 菅原ますみ，詫摩紀子：夫婦間の親密性の調査－自記式夫婦関係尺度について－，*精神科診断学*，8（2）：162-164，1997
- 16) FIT（家族イメージ法）マニュアル，亀口憲治監修，システム心理研究所編，システムパブリカ，東京，2003
- 17) 舟島なをみ：看護のための人間発達学，25-27，医学書院，東京，1998
- 18) Wandersman, L. P. : The adjustment of fathers to their first baby: The roles of parenting groups and marital relationships, *Birth and the Family Journal*, 7（3）：155-161，1980
- 19) 堀口美智子：「親への移行期」における夫婦関係－妊娠期夫婦と出産後夫婦の夫婦関係満足度の比較を中心に－，*生活社会科学研究*，7：81-95，2000
- 20) 高橋久美子：第1子出生前後の夫婦関係の変化，*日本家政学会誌*，38（5）：415-423，1987
- 21) 永井暁子：出産・夫の育児と妻の夫婦関係満足度，*社会調査の公開データ 2次分析への招待*，185-194，東京大学出版会，東京，2000
- 22) 石原邦雄，島内憲夫：家族発達の理論と実証－ヒルの場合－，森岡清美，青井和夫編 *ライフコースと世代－現代家族論再考－*，185，垣内出版，東京，1985
- 23) 前出朋美，島谷まき子：家族イメージ法の分析指標の検討－肯定的家族観・父子関係・母子関係・両親関係との関連－，*学苑・人間社会学部紀要*，761：40-47，2004
- 24) 柏木恵子：父親の発達心理学，父性の現在とその周辺，249，川島書店，東京，1999
- 25) 森岡さやか，小菅律，亀口憲治，他：家族イメージ法（FIT）の現状と今後の展望，*東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要*，29：221-236，2006
- 26) 亀口憲治：家族のイメージ，38-42，河出書房新社，東京，2003
- 27) マーチン・グリーンバーグ／竹内徹訳：父親の誕生，150-164，メディカ出版，大阪，1994
- 28) 大下由美，亀口憲治：中学2年生の家族イメージの研究－父，母，子の3者関係イメージ－，*家族心理学研究*，13（1）：1-13，1999

Assessment of spousal relationships before and after the birth of the first child from the viewpoint of fathers: analysis by the Family Image Test (FIT)

Yuko Sasaki¹⁾ Mari Takahashi²⁾

1) Faculty of Health Sciences, Kyorin University

2) Faculty of Nursing, Kitasato University

Key words: Father, birth of a child, spousal relationship, family system, family image

The present study investigated changes in spousal and father-mother-child relationships among 69 men who became fathers for the first time. Analysis was conducted using the Marital Love Scale, with the Family Image Test utilized as a more objective assessment of family relationships, including spousal relationships.

Results were as follows:

- 1) An assessment of spousal relationships before and after the birth of the first child indicated no significant differences in the total Marital Love Scale score; however, the spousal tie, which was presented by the thickness of the lines drawn on the Family Image Test figure decreased significantly after the birth of the first child ($p < 0.05$).
- 2) Before and after the birth of the first child, fathers began to focus more on their child rather than on their spouse.
- 3) Family Image Test results indicated the following four patterns of the father-mother-child relationship: "family centered", "spouse centered", "mother-child centered" and "father-child centered". After the birth of the first child, the ratio of the "spouse centered" pattern significantly decreased ($p < 0.05$), while the ratio of the "mother-child centered" pattern significantly increased ($p < 0.05$).

From the viewpoint of the fathers, the Family Image Test revealed a change in the family system from a spouse-centered system to a parent-child-centered system after the birth of the first child. These results suggest the usefulness of the Family Image Test as a technique for assessing family relationships soon after birth.